

● シリーズ 私の見た日本 Vol.178

地域のリソースを活かした場所の再発見

李 東勲 (リ ドンフン)

韓国・ソウル出身。2003年韓国・慶熙 (kyung Hee) 大学卒業。2005年慶熙大学大学院修了。2009年～2014年早稲田大学理工学部の助手・助教。2016年早稲田大学 創造理工科研究科 博士学位取得 (建築学)。2015年 NASCA入社、現在に至る。
 主要作品は、2009年 [SD review 2009] 入選、2010年 [Tokyo 2009 : Fashion Museum in Omotesando Street] 国際アイデアコンペ最優秀、2012年 [同志社大学「京田辺キャンパス礼拝堂および関連施設」] 設計提案競技、優秀作品 (次点) など。



日本に来てからの日々を振り返ってみると、私はさまざまなきっかけや友人のおかげで日本の建築や文化を体験することができたと思っている。学部生の時にした福岡から東京までの旅行をはじめ、その後、母校である慶熙 (KYUNG-HEE) 大学と早稲田大学・古谷研究室との交換留学生プログラムに参加し、東京での短期滞在を経験した。留学した当時は日本語がわからなかったが、恩師の紹介でホームステイをしながら日本語はもちろん日本文化を知ることができた。こうした縁がきっかけとなり、早稲田大学の博士課程を経て、現在は設計事務所です仕事をしている。

早稲田大学在学中は研究や委託研究プロジェクトでさまざまな地域に関わってきたが、現在は仕事の関係で日本の各地を訪ねて地元の方々や話すチャンスに恵まれている。当たり前なことなのかもしれないが、それぞれの地域には風土、歴史、文化を基に自然発生した建造物や場所があり、そのリソースを活用しながら新しい可能性を模索し、面白い空間やプログラムが生まれることを興味深く感じている。またこれには建築家のような専門家と、その地域の住民がお互いに理解し、協力しながら地域が少しずつ成長する日本ならではのプロセスがあると思った。このように

「私の見た日本」は、地域にあるリソースへの関心と活用によって個性のある場所や町並みが各地にあることだ。そしてその地域がそのまま美術館や博物館といった体験したくなる新しいリソースとなったいくつかの事例を紹介したい。

博士課程中に国際学生ワークショップを企画したことがあり、町並み計画が優れた長野県小布施町を海外学生に紹介したことがある。小布施町は栗、北斎、花の町として有名で、上信越自動車道が通っているため食事やお土産を求める観光客のリピート率が高い町である。この町は1980年代から北斎館と小布施堂の周辺を建築家、行政、住民が協力し、古い町並みを残しつつ、新しい建物を既存景観と調和させる「修景」を実施している。また栗の木ブロックを利用した歩道があるなど、町のリソースを活用して美しい町並みを保っている (pic.01)。そのなかでも最も印象に残っているのは「オープンガーデン」である。花の町である小布施町には表側の歴史ある景観とともに、裏側には住民が大切に育ててきたきれいな中庭がある。2000年頃から個人住宅の庭を地域に開放し、近隣住民や観光客が中庭を自由に出入りできる「オープンガーデン」のプログラムを実施している (pic.02)。

観光客にとってプライベートな中庭を見ることは他の観光地で体験しにくいことであり、その体験を通してよりローカルな町並みを楽しむことができる。さらに町のなかのいくつかの中庭はつながっており、中庭を通り抜けて散歩しながら住民と挨拶することでより親近感を感じ、町を知ることができる。このようにたとえ町に点在するプライベート要素であっても、それらを開放し、つなぐことで地域のリソースとして新しい価値が生まれることがわかる。またそのリソースを活用することで、他の地域では体験できない個性のある町並みが形成され、さらに観光資源としても期待される事例である。

既存リソースはわれわれの生活のなかに常にあるものであり、それを集めて見方を変えることで新たな力を発揮することがある。昨年末に四国・高知県長岡郡大豊町にある「豊永郷民俗資料館」に行った。資料館が位置する豊永郷は高知県と徳島県の県境にある山間地域であるため、昔から林業が盛んで、生活に必要な鋸、牛犁、茶鎌などの民具が多く使われていた (pic.03)。社会変化に伴いこれらの民具は使われなくなり町から消えていったが、伝統的な民具の価値を大事にしようと収集を続け、現在は約10,000点もの民具が

収蔵されている (大豊町役場HPより)。2016年に新設された同資料館だが、その展示方法が面白い。民具一つひとつは小さくて古いものであり、ともすれば忘れられやすい地域のリソースである。しかしこの資料館では圧倒的な数の民具を種類ごとに集めて展示することで、つくり手によって形が違う手づくりの道具ならではの微差が生む迫力を感じさせる (pic.04)。民具という地域リソースとして認められていなかったものがもつポテンシャルに着目し、そして展示方法を工夫することでその価値を引き出し、その地域の風土と文化を感じる固有の場所をつくり出した事例である。また工業化社会に住んでいるわれわれにとって、この場所を通して先祖たちが工夫した形と人間の力を追体験することができる。

新たな場所の再発見は既存リソースの活用だけではなく、その町になかった新しい要素を加えることでできる場合もある。島根県雲南市は2004年に6町村が合併して誕生した市である。雲南市木次町の木次駅の近くには、道を挟んで川沿いのさくら並木と並列した駅前の商店街がある。しかしこの商店街は日本各地の地方都市同様、空き店舗が増えシャッター街化が進行していた (pic.05)。地域再生プロジェクトとして参画した早稲田大

学・古谷研究室は、商店街隣にある川沿いのさくら並木が既存のリソースとしてポテンシャルをもつことに着目した。さくら並木を活用し商店街を活性化するために、それらをつなぐ長さ約100mのロングテーブルを提案、そして住民と一緒にテーブルを設置し、「さくらまつり」を企画した。さくらが満開となる季節になると、花見をする人々が赤色のロングテーブルを目印に商店街まで足を運び、商店街のお店で買った食べ物を周りの人々と食べながら話し楽しめる空間に生まれ変わる (pic.06)。このロングテーブルは人々が集い、出会うきっかけとなる。このように「さくらまつり」は既存リソース (ハードウェア) に新しいリソース (ソフトウェア) を加えて、刺激を与えることで地域に潜在していたポテンシャルを導き、オリジナリティのある場所を発見した事例である。

以上のように、日本各地ではそれぞれの地域に潜在するリソースを専門家と住民がともに探し、有効活用する事例が見られる。そしてこのようなアクティビティは生活を支える新しいプログラムや空間をつくり出し、その地域ならではの面白い場所を創出している。これらの事例は地域のリソースに基づいているため、グローバル化する社会のなかでローカルリティのあるアイデンティティをもっているだ

ろう。さらに近代化以降の普遍化・標準化される建築や都市空間に対して、もう一度われわれが住んでいる環境を見直すきっかけとなる。今われわれが住んでいる建築や都市空間を見てみると、どこに行っても同じ風景が広がっていると感じる時がある。これは日本だけではなく、韓国や中国などのアジア圏の拡大する地方都市でも同じ現象が起きており、その場所がもつ固有の風景や空間が消えてしまうのは残念なことだ。しかし日本の地方都市で見られる既存リソースの活用と場所の発見は、今後アジア都市ならではの空間づくりにとって大きなヒントになると考えられる。そしてその場所がつくる町並みは、他のどこにもない空間性をもっているため、私のような外国人にとっても魅力的に感じられ、いつかはその地域に行ってみたいというモチベーションが生まれる。そのため今も機会があるたびにさまざまな町を訪ね、その町の魅力を探ることが私の楽しみである。最後に、私の見た日本が、グローバル化する社会において持続再生可能な生活環境の構築とともに新たな資源となることを期待している。



01 長野県小布施町 木ブロックの歩道と古い町並みとが調和する建物がつくる美しい町並み



02 観光客を迎えるオープンガーデンの案内サイン



03 高知県大豊町 豊かな自然に囲まれた豊永郷民俗資料館



04 資料館に展示された迫力のあるさまざまな形と種類の手づくり鋸



05 島根県雲南市 木次町商店街に見られる日常の風景



06 赤いロングテーブルを設置することで生まれる変わる商店街とさくらまつり